128. 尺骨神経溝撮影法の検討

a study of ulnar groove projection

聖マリアンナ医科大学病院 放射線部 ○堀越 良雄 ・ 小山内 司郎

Horikoshi Yoshio Osanai Shirou

中川 義明 ・ 高坂 元包

Nakagawa Yoshiaki Kousaka Motokane

目的)

尺骨神経溝の撮影は、上腕下部において尺骨神経への影響が疑われる、神経溝の変形、骨棘の形成等を観察するために行われる。再撮影の多い部位のひとつであるため撮影への認識を深め、正しく撮影が行えるよう検討を行った。

方法)

＜1＞ 成書からの撮影法の種類の調査。＜2＞ X線解剖学的な尺骨神経溝の走行の検討。

＜3＞ 応用撮影法の検討。

結果)

＜1＞撮影体位は調査の範囲では、ほとんど同様であった。要約すると、上腕正面位にて肘関節を 30° ～ 45° 屈曲。前腕回外位でカセット面に付け、更に上腕を 20° ～ 25° 外転する。X線束は、尺骨神経溝に向け垂直に入射する。

＜2＞上記撮影法に則り、肘関節 45° 屈曲にて上腕の外転角度を 0° ～ 50° 変化させた結果、 30° が最も良く描出した。次に上腕 30° 外転にて肘関節の屈曲角度を変化したが、何れも良く描出された。神経溝は上腕骨の内側上顆を前方へ回り込む様に位置するので観察の視点が異なるためである。従って、 45° の屈曲は必要十分である。

＜3＞再現性良く、しかも整位を簡単にするには写真(1)のごとく外転をせずにX線斜入する方法が良い。写真(2)は通常の逆投影で 30° 外転して手前上方から 30° ～ 45° で斜入する方法であり、神経溝の遠位の観察や肘関節の屈曲や伸展の不可能な場合に有用である。写真(3)は肘関節が伸展固定している場合の応用例で、後上方からX線斜入する方法である。屈曲が不十分であると、X線写真上、肘頭が神経溝に一部重なるが評価可能な写真は得られる。

まとめ)

尺骨神経溝は上腕骨背面下部を約 30° で、内側上顆の内側に向けて斜走する。上腕骨は正しく正面位にする。この時、肘の生理的外反を考慮する。肘関節屈曲角度は 45° 前後。上腕骨は外転せずに 30° で外側上方より斜入をする。

参考文献)

骨・関節X線写真の撮り方と見方：堀尾 重治

X線撮影技術学：江副，他

POSITIONING IN RADIOGRAPHY：K.C.CLARK

写真 1

写真 2

写真 3